

都市下層階級の生活世界と意味秩序 (1)

有 里 典 三

1 はじめに

現代を代表する都市エスノグラファーの一人、イライジャ・アンダーソン (Elijah Anderson) がこれまで発表してきた著作の背後には、スラム地域や「都市の村」が解体した危険な場所なのか、それともそこには一定の社会秩序が存在しているのか、という古くからの都市社会学上の争点が埋め込まれている¹⁾。初期シカゴ学派の「社会解体」(social disorganization) という立場 (修正主義的アプローチ) は、ホワイト (William Foote Whyte) の古典的著作『ストリート・コーナー・ソサエティ』(1943年、以下SCSと略称) の挑戦を受け、ガンズ (Herbert Gans) が著した『都市の村人たち』(1962年) やリーボウ (Elliot Liebow) の『タリーズ・コーナー』(1967年) の実例によってさらに疑義を唱えられることになった。また、サトルズ (Gerald D. Suttles) の『スラムの社会秩序』(1968年) やコーンブラム (William Kornblum) の『ブルーカラー・コミュニティ』(1974年) は、都市下層階級の近隣地区やコミュニティが実際には社会的に複雑な方法で高度に組織化されていることを明らかにした²⁾。しかしながら、アンダーソンがシカゴ市内の『ジェリーの店』で参与観察をはじめた70年代初頭の時点では、この古くからの争点に最終的な結論が下されてはいなかった。アンダーソンの『コーナーにある居場所』(1978年、以下POCと略称) や『ストリート・ワイズ』(1990年、以下SWと略称) の研究上の意義の一つは、大都市インナーシティの黒人下層階級の生活世界をエスノグラ

フィックな手法を使って分厚く記述・洞察し、こうした学術上の争点に新たな貢献をしている点である³⁾。

本稿では、ホワイト、リーボウ、アンダーソンという米国を代表する都市エスノグラファーの中心的系譜に注目して、それぞれがスラムあるいは黒人ゲットーで生きる都市下層階級の人びとの生活世界や意味秩序をどのような問題意識にしたがっていかに洞察したのか、さらには彼らの研究が上述した都市社会学上の争点にいかなる具体的な貢献をしたのか、概括的に検討する。

2 シカゴ学派のスラム研究と「社会解体」の論拠

19世紀末のドイツの哲学者ゲオルク・ジンメル (Georg Simmel) が1903年に発表した「大都市と精神生活」ほど、都市研究のその後の考え方に影響を及ぼした論文はない。ジンメルによれば、大都市では、神経的刺激的強さゆえに他人に無関心になり、貨幣経済の影響力の強さゆえに計算という合理性に基づくインパーソナルな社会関係が広がり、多様な大量の人びとが協同するゆえに時間厳守が求められる。これらは、都会人に自由と疎外をもたらすという⁴⁾。

ジンメルのこの考えは、その後、アメリカのシカゴ学派社会学に継承され、もっぱら社会解体の事例に関心を集中させながら膨大な経験的都市研究を生み出すことになる。たとえば、都市の社会学の誕生を告げたパーク (Robert Ezra Park) の記念碑的な論文「都市——都市環境における人間行動研究のための若干の考察」は、ジンメルの貨幣論の影響を強く受けている⁵⁾ し、彼の後継者であるワース (Louis Wirth) は有名な「生活様式としてのアーバニズム」の中で、「都市に特徴的な生活様式を構成する諸特徴の複合」をアーバニズムと概念化し、それを社会学的に研究するための理論的枠組みをアーバニズムの理論として定式化した⁶⁾。その中でワースは、社会組織の形態におけるアーバニズムとして、ジンメルが指摘した第二次的接触が第一次的接触に取って代わり、親族結合が弱体化し、家族の社会的意義が減少し、近隣社会

が消滅して、社会的連帯の伝統的な基礎が崩れる傾向に注目している。これはワースが、「社会解体」という見地に立ってその帰結的状况を分析することをシカゴ学派都市研究の主眼に据えていたことを物語っている。シカゴ学派の都市研究の中心テーマは、都市を一つの実験室とみなし、そこで起こっている社会的解体現象を記述的に認識するとともに、そのメカニズムを説明するための新たな都市理論を創出することにあつたのである。ちなみにワースは、別の著作の中で、「社会解体」の論拠ともなつたジンメルがこの論文を「社会学的視点から書かれた都市に関する最も重要な単独論文」⁷⁾と絶賛している。

では、シカゴ学派が含意している社会解体とは、具体的にはどのような状態を指すのだろうか。それはフォーマルな法的秩序の解体を意味しているのではない。そうではなく、習俗や慣習による道徳的秩序の解体によって起こる機能障害のことを指している。もっともよく知られた社会解体の定義は、トマスとズナニエツキ (William I. Thomas & Florian Znaniecki) が下した「既存の社会的行動規範がグループ内の個々のメンバーにあてる影響力が弱まる現象」⁸⁾である。地域的に言うと、スラム、ユダヤ人町、小シシリー、黒人地帯などのように、犯罪、非行、自殺、浮浪などの病理現象が異常に高い比率で発生している「凝離地域」を指す。当時、スラムについて一般に認められた見方を示したマッケンジー (Roderick Duncan McKenzie) やスラム研究の代表的な古典『ゴールド・コーストとスラム』を著したゾーボー (Harvey Warren Zorbaugh) は、都市において個別化とそれによる社会解体が急速に進んでいるとすれば、都市内部に存在するこうした現象のもっとも顕著な特徴をスラムの中に見出せるのではないかと考えていた。マッケンジーの論文から引用した次の文章はそのことを端的に示している。

「スラムは、これまで“魂と使命感が失われた地域”であると記述されてきた。あるいは、個人や家族集団が、忌避して当然の人たちと、無理に親しくしながら生活している地域であると記述されてきた。あるい

は、外部の権威筋によって押しつけられた規範を除けば、礼儀作法や社会行動の規範が何一つ存在しない地域であると記述されてきた。こうした環境のなかでは、個人には地位もなく、代表的な市民も存在せず、心の通い合いや安心感を求める人間的な欲求も、満たされないままの状態に置かれている⁹⁾。」

社会解体はもともとパークをはじめとするシカゴ学派の実践的な課題であったが、以上の引用からもわかるようにスラムこそは「社会解体の実例」であり、「解体现象を研究するための格好のフィールド」と受けとめられていたのである。

3 W. F. ホワイトの都市エスノグラフィーの地平

3-1 W. F. ホワイトの問題意識と研究テーマ

【ホワイトによる批判の論拠とスラム研究の新しい方向づけ】

ホワイトは、シカゴ大学大学院に在籍中、社会人類学者のロイド・ウォーナー (William Lloyd Warner) と社会学者エヴェレット・ヒューズ (Everett C. Hughes) の指導を受けながら、ノースエンド調査の内容を凝縮し原稿を推敲するなどして Ph. D. の取得をめざした。その時期に、スラム地域に関するシカゴ・ソシオロジーの「社会解体」的研究の成果を集中的に検討したが、「それらのほとんどが価値のない、誤解を与えるものだと確信した。私にとってそれは仕事の価値を減ずるもののように思われた¹⁰⁾。」と厳しく批判している。ホワイトは批判点に対処するには、「既存のスラム研究の性格をかなり変更して新しい方向づけが必要になる」として、次のような点を指摘した。

- ①スラムにも異なったタイプの地区が存在し、その間には明確な違いがあることを認識する必要がある。たとえば、シカゴ市のニア・ノース・サイドの「下宿屋地区」と「移民者の居留地」などである。これら二つのスラム地区は、ともに人口が密集し、住宅条件が劣悪で、住民の所得も

低いため、フィジカルで経済的な指標に注目しても社会学的な分析に必要な相違点は得られない。だが、二つの地区の社会生活は基本的に異なっているため、両者をひとまとめにして一般化を図っても誤解を招くだけである¹¹⁾。

- ②移民の子供たちは両親が内面化した規範を身につけていないので、移民の家族集団は解体する傾向があるとたびたび指摘されてきた。家族解体の実例の多くはこの点を強調するために引用されてきた。だが、解体の事例ばかりに関心を集中させていると事態を歪曲化する。その証拠に、コーナーヴィルの研究から、忠誠心というもっとも親密な絆を保持している多くの家族の存在が明らかになった。われわれに今必要なのは、個人や集団がうまく社会関係を再編成して、対立を調停した場合の方法を研究することである。

さらに、社会学者のなかには家族解体の研究ばかりに気をとられ、スラムに見られる組織化の程度を過小評価する者もいた。そして、暗黙のうちに、家族だけが親密でパーソナルな関係を組織し、個人の行動を統制することができる唯一の集団であるという誤った前提が作られてしまった。だが、われわれが第一次的な結合を生み出す組織力を獲得するためには、いつでも家族に依存しなければならないと考える理由は何もない。たしかに家族は、スラムの社会生活を組織化する際にヨーロッパの農村コミュニティにおいてと同様の役割を果たしていないが、それとは別の集団（たとえばスラッシャーが詳述した街かどのギャング団）がスラムに現れて家族に代わって組織化の役割を果たしている¹²⁾。

- ③スラムを古い集団や古い社会規範の崩壊という見地からのみ研究しても得るところは少ない。なぜなら、そこには新しい集団や新しい社会規範が生まれているからである。仮に社会解体を「既存の社会規範の影響力が減ること」と規定し、その規範を移民者たちが生まれ育った農村社会の規範と考えるならば、スラムは確かに解体地域であるが、それは実態の一部でしかない。スラムの社会組織の特徴は、より多くの社会学者

たちが社会解体の調査から社会的再組織化のプロセスの調査へ研究上の
 力点を移したときにはじめて理解できるだろう¹³⁾。

- ④「都市社会は、一般的には未開社会の部族と比べるとより一層個別化されて
 いるが、だからと言って都市社会が単なる個人の集合体から成り
 立っているわけではない。人間は——都市においてさえ——集団生活を
 営んでいる。したがって《スラムの社会学の課題》は(ほかの場所と同様に)、
 内集団における諸個人の相互関係のあり方を確定し、次に、その社会を
 構成している集団間の諸関係を観察することである。そのためには、社
 会学者は一人の参与観察者となって、スラムの社会生活におけるもっと
 も親密な活動を調べてみる必要がある¹⁴⁾。」

3-2 W.F.ホワイトの調査地と調査方法

【調査地：ボストン既成市街地周縁のノースエンド】

「SCSの調査地はボストン既成市街地周縁のノースエンドである。ボスト
 ン内湾に接するノースエンドは、イタリア系移民の集住地として知られ、イ
 タリアン・スラムと規定されていた。ホワイト自身は、シカゴ学派とは対照
 的に、スラム地域を「低収入の人びとが手入れの行き届かない家で、貧弱
 な衛生設備と劣等な健康状態のもとに密集して暮らしている都市的一地域に
 すぎ」¹⁵⁾ ず、「実際は多くの結束の固いグループとしてのまとまりを含む、
 高度に組織化された社会」¹⁶⁾ であると認識していた。そして、そのような状
 況のもとで人びとがどのように暮らしているのか把握するために、ノースエ
 ンドの社会人類学的研究を行った。

【調査方法】

ホワイトは、ハーバード大学で同僚の奨学金給費研究員だった社会人類学
 者のコンラッド・アレンズバーグ (Conrad M. Arensberg) と納得のいくまで議
 論し、幸運にもノースエンド調査をはじめの前に、彼から本質的な助言を得
 ていた。アレンズバーグは、ヤンキーシティの研究でロイド・ウォーナーと
 数か月間ともに仕事をしていた。こうした調査経験を踏まえて、アレンズバー

グは、ホワイトにノースエンドのような未知のコミュニティには、あたかも別の社会を全体的に研究するようにアプローチすべきであると助言した。その際、彼が特に強調したのは、「行動している人びとを観察することの重要性と、実際の行動を道徳的な価値判断から完全に解き放して詳細に記録することの重要性」¹⁷⁾ についてであった。

【ホワイトのコミュニティ・スタディの独自性】

ノースエンドの調査をはじめるにあたって、ホワイトが意図していたのはコミュニティ・スタディであった。その有力モデルと考えたのは、やはり人類学的視点で現代社会を取り上げたリンド夫妻 (Robert S. Lynd & Helen M. Lynd) の『ミッドウルトウン』(1929年) と『変貌するミッドウルトウン』(1937年) であった。リンド夫妻のコミュニティ・スタディの特徴は、調査対象となった人口 36,000 人の小都市 (インディアナ州マンシー) に住む一般的な人びとに焦点をあて、当該コミュニティをその生計・家族形成・青少年の育成・宗教・余暇活動・地域活動といった六つのトピックにもとづいて、特定の時点で記述し分析したこと。もう一つは、当該コミュニティの住民を業務階層と労務階層に二分し、叙述展開のいたる所でこの両階層の比較を行って社会成層の研究に足跡を残した点である¹⁸⁾。

ホワイトは、『ミッドウルトウン』に研究上の刺激を受けながらも、ノートン団とイタリア・コミュニティ・クラブのケース・スタディを書き上げる中で、彼がノースエンドでやろうとしている調査が、言葉の通常の意味におけるコミュニティ・スタディではないことに気づく。ホワイトのコミュニティ・スタディは、いわば手探りの現地調査の中から構想された独創的な研究成果である。リンド夫妻のコミュニティ・スタディと比較した場合、ホワイトのコミュニティ・スタディには少なくとも次の四つの特徴が指摘できる¹⁹⁾。

① ホワイトがノースエンドでやろうとしているコミュニティ・スタディは、一般的な人びとの研究ではなく特定の個人や集団の研究であること。

② しかも、家族、近隣住区、学校、教会などの基礎集団から逸脱し周縁

世界にたむろする若者たちや、彼らが組織化したギャング団に注目し、表通りのコミュニティ・ライフとは区別される裏通りのストリート・ライフの秩序を解明することに焦点を当てたこと。

- ③個人や集団を社会構造における彼らの位置の観点から把握しようとしたこと。
- ④特定の時点におけるコミュニティの研究ではなく、時間の経過とともに発展し変化する集団を観察し分析したこと。

「個人や集団を基礎として、コーナーヴィルについて何か意味のあることを言えるのだろうか。私はもし個人や集団を社会構造における彼らの位置の点からとらえたならば、意味のあることを言えるにちがいないと認識するようになった。私はまた、個人や集団がどんなに違っていても、そこには基本的な類似性が見出されるはずだと思わずにはいられなかった。したがって、コーナーヴィルの街かどのギャング団について何か意味のある記述をするために、すべての街かどのギャング団を研究する必要はないはずである。もちろん、ひとつのギャング団を研究すれば、事足りるというわけではないが、見出した仮定上の類似点のいくつかに焦点をあてて精査すれば、この問題の一部分については操作可能になる²⁰⁾。」

【ホワイトの集団研究の特徴】

ホワイトの集団研究には二つの方向があることに留意しておきたい。一つは特定集団における個人の役割を研究する方向、もう一つは特定集団がより一層大規模な政治組織、ヤクザ組織 (the racket organization)、あるいは社会的諸機関との関連でどのような位置を占めているか研究する方向である²¹⁾。

SCS 第1部の小物たちの世界では、二つの対照的な内集団 (すなわちノートン団とイタリア・コミュニティ・クラブ) が組織化される過程とそれらが織りなす小物同士の階層間の社会関係が、セツルメント・ハウスという外集団を媒介装置として分析される。それに対して第2部の大物たちの世界では、ヤク

ザの顔役トニー・カタルドと表の世界の実力者である州の上院議員ジョージ・ラベロがそれぞれ組織しているヤクザ組織と政治組織が研究対象になっている。これらは対照的な社会集団であるが、ノース・エンド在住のイタリア系移民を中心に組織化されている点で、やはりエスニック・コミュニティにとって内集団の機能を果たしている。彼らの特定の行為が観察され、彼らの行為の意味を説明するために、二つの対照的な内集団が組織化される過程と両者が織りなす大物と大物、大物と小物の階層間の社会関係が、警察組織という外集団を媒介にして分析されている。

さらに、時間の次元の重要性については、ノースエンド調査を振り返ってホワイトは次のように語っている。

「私の最も価値のある発見は、いずれも一つの集団を調査期間を通じて追及することによって得られた……。時間の次元を利用せずに、集団構造もしくは組織構造について意味のある話をするのは殊のほか困難である。一時点における静的な状況は、相互に関係し合う諸要素の位置関係を示しているだろうが、それらの要素を統合している諸力を示してはいない。それを示すことができるのは、調査期間を通じて集団を観察し、集団の内部構造や集団と外部の世界との関係がどのように変動したかを記述する時だけである。その時にわれわれは、個々のメンバーや集団に作用している圧力と対抗圧力を観察できる位置を占めたと言える²²⁾。」

従来のコミュニティ・スタディが、あらかじめ設計された調査項目を一枚一枚映し出した静的な「スチール写真」だとすれば、ホワイトがノースエンドで採用したコミュニティ・スタディは、調査者自身もその一部分を構成する関係性の変容の中で、生活世界の移り変わりを動的に描き出した「活動写真」であったとすることができる²³⁾。

このようにホワイトは、基礎集団から逸脱しアウトサイダーと見なされている街かどのギャング団がそれぞれのたまり場を中心に形成している独自の

生活世界を詳細に観察することによって、エスニック・マイノリティの見えないコミュニティの実態が解明できると考えたのである。ホワイトはこうした研究方針を採用することによって、スラム（過密不良居住地区）に対する既存の誤った見方を一変させ、その社会構造図式の組み換えに見事成功した。

3-3 W.F. ホワイトが読み解いた都市下層階級の意味秩序

ホワイトは、イタリア系移民のエスニック・コミュニティの深層構造をどのように読み解いたのか。そこには部外者には見えないどのような特徴をもった社会関係が埋め込まれているのだろうか。以下、主要な観点を指摘してみよう。

- ①街かどのギャング団は、長期におよぶ仲間たちの居住上の結び付きがきっかけとなって組織化された。集団活動は、それぞれのギャング団がたまり場になっている特定の街かどを中心に展開されていた。メンバーたちは集団内で特定の地位を占め相互依存関係にあったが、それはつまり、個々のメンバーが集団内で慣習的な相互作用のパターンを身につけていることを意味していた。このような相互作用から、街かどのギャング団の結合力にとって基礎となる互恵的な義務関係のシステムが生じてくる。街かどの若者たちが集団のユニットとして活動する時の掟は、可能な限り友人を助けること、そして彼らを傷つけるような行為をしないことである。
- ②その中心軸であったのがリーダーである。リーダーとはギャング団の利益を代表して意思決定を行う存在であり、ギャング団の外の勢力と交渉を行う仲介者である。リーダーを抜きにしては、どんな大物もギャング団の協力や支持を得ることはできなかった。リーダーはメンバーを平等に扱うのではなく差別化して扱っていた。ギャング団のメンバーたちは毎日集合し、きわめて高い頻度で相互に関係し影響を及ぼし合っていた。ギャング団のメンバーたちは、リーダーの地位にあっ

てセット・イベント（すなわち、一人のメンバーが二人あるいはそれ以上のメンバーのために行う活動）で集団のために活動をはじめるか、中間的な地位にあってリーダーのはじめたことにしたがうか、それとも下位のメンバーのために活動をはじめるか、あるいは下位にあっていつもセット・イベントにしたがうか、のいずれかの立場を取る。そして、長期間にわたる継続的な集団活動を通じて、それぞれが安定した相互作用のパターンを身につけることになる。メンバーの精神的な安定にとっては、こうした相互作用における彼なりの習慣的なパターンの継続が必要条件となっていたのである²⁴⁾。

- ③街かどのギャング団にはもちろん会則も内規もない。意思決定はコーナー・ボーイズのインフォーマルなつき合いを通じて行われた。みんなを説得して懸案事項についての同意を得るとというのが最善の方法であり、彼らにとっての組織原理であった。それに対して、イタリア・コミュニティ・クラブのメンバーたちは、会場以外の場でつき合うことはめったになかった。メンバーたちを結びつけるインフォーマルな組織が存在しなかったことが原因で、カレッジ・ボーイズのあいだでは権威や責任や恩義といった事柄について共通の理解も得られなかった。こうしたメンバーを組織化するために、会長のチックは議会主義を当てにした。これこそがフォーマルなイタリア・コミュニティ・クラブの組織原理であった。
- ④街かどのギャング団はその地区の青年たちを動員しているし、そのコミュニティ全体におよぶヤクザ組織や政治組織の下部組織を形成している。
- ⑤ヤクザ組織や政治組織は、ノースエンドの住民にとって望ましい規範からの逸脱物などではない。これらの組織は、ともにスラムに存在する大小のインフォーマルな集団を統合したり調整したりする役割を果たしている。
- ⑥ヤクザ組織や政治組織は、ノースエンドの地域住民のために重要な役

割も果たしている。政治活動やヤクザ活動は、民族的な背景や階層的地位の低さのために、「立身出世」を妨げられている個々の移民者に、これまで《社会移動の重要な手段》を提供してきた²⁵⁾。

- ⑦スラムに住む大多数の青年たちは、《政治組織とヤクザ組織と街かどのギャング団によって牛耳られた社会的世界》に参加している。それこそがスラムに住む青年たちの生活世界である。この生活世界の内部でも地位をめぐる競争は存在しているが、その競争にしても、前述した《スラム固有の規範》にしたがって行われている。スラムに見られる主な対立は、スラムの組織化された下層階級の生活とやはり組織化された社会的地位の高い中産階級の社会との対立に他ならない。

4 E. リーボウの都市エスノグラフィーの地平

4-1 E. リーボウの問題意識と研究テーマ

【問題意識】

「貧困層人口と貧困層問題」は、急速な人口の増加、技術の発達、都市部への人口流入などの組み合わせにより拍車がかかり、第2次世界大戦後、確実に増加した。1963年には、貧困層は全人口の4分の1を占めるまでになり、そのうちの約30%は黒人であった。すなわち、貧困層に占める黒人の割合が高く、黒人のうちの高い割合が貧しい人びとだった。

しかしながら、公民権運動のただなかにあった1960年代前半の黒人たちは未だ、かれらの生活実態に即した政策の恩恵をほとんど受けることなく、行政からは無策のまま放置されていた。国立精神衛生研究所の協力研究員であったリーボウは、アメリカ連邦政府の資金援助を受けた研究で、ワシントンDCの黒人集住地域に日夜通い詰め、かれらと共に生活し、かれらと語らい、生きた生活実態を都市人類学的に明らかにしようとしたのである。

【研究テーマ：都市に住む下層黒人男性の生活世界の解明】

アメリカ社会では、黒人貧困層は白人貧困層よりも貧しく、何世代も続け

て貧しいという傾向があるため、貧困と社会・経済的生活の境遇は、肌の色のような遺伝的特徴であるかのように見える。世代間の貧しい生活様式の伝達という実態は、この伝達を必然化する環境である、黒人家族の生活への関心を惹起してきた。黒人の家族の相当数は自立できていない。黒人の家族は下層階級の都市家族の典型であり、貧困との闘いにおいて政策を策定立案する人たちの主要な対象となってきた。しかしながら、「私たちの貧しい黒人の家族についての理解の大半は、女性と子どもが重視され、それに比して成人男性が軽視されすぎているために、偏ったものとなっている」²⁶⁾のが実状であった。

下層階級の生活を研究する上で、黒人の成人男性がなぜ見落とされてしまうのだろうか。第一の理由は、黒人家族が男性不在で、「女性本位」、あるいは「女性中心」の、一世代または二世代の女性と、彼女たちが養う子どもたちによって構成されていて、一家の中に男性が「見当たらない」という特性を直接的に反映しているからである。第二の理由は、中流階級の生活に最も直接的に関わってくる、非行や公的扶助に関心が寄せられるからである。非行は通常少年・少女の行ないとして言及され、そのために定義の時点で成人男性は除外されている。同様に、公的扶助は通常女性と子どもの陥る状態とみなされているため、ここでも健康で丈夫な成人男性は社会的援助を受ける必要がないとして除外されている。このように下層階級の黒人男性は、単に女性、若年層、子どもたちよりも目が届きにくいところにいるという理由だけで、研究の対象から無視されてきたのである²⁷⁾。

リーボウは、その主著『タリーズ・コーナー』の中で、「黒人男性たちは、いかなる人間関係と文化的背景のなかで毎日を生きているのか、どうして積極的に定職をもとんとせず日々路上でたむろしているのか、どうして入籍して妻子を養おうとせずに結婚生活を投げ出してしまうのか、彼らはなぜ世代を越えて続く貧困や無気力の悪循環から抜け出せないのか」²⁸⁾という問題を取り上げ、下層階級の黒人男性の視点からその実態を解明している。

4-2 E.リーボウの調査地と調査方法

【調査地：ワシントンDCのインナーシティに位置するタリーズ・コーナー】

E.リーボウは、1960年代前半に、ワシントンDCのインナーシティの荒廃地域にある、タリーズ・コーナーと呼ばれる街角でほとんどいつでもたむろしたりうろついたりしていた黒人青年たちの、うつろいゆく群像について、感性豊かでタイムリーな本を書き上げた。このタリーズ・コーナーにあるニュー・ディール・キャリアアウト・ショップ [本書の舞台となる雑貨小売と軽食の商店。以下、キャリアアウトと略称] が、複雑だが生活範囲の限られた彼らの日々の生きざまがよどみ、流れる舞台となっていた。この地域は「公的扶助を受けている人の割合が市内で最多であり、婚外子の出生数が最も多く、母子手帳を交付されないまま出生する女性の割合が最も高く、配給食糧を受ける資格のある人が二番目に多く、医療援助の有資格申請者が三番目に多」²⁹⁾ い典型的な黒人下層階級の集住地域であった。

リーボウはこうしたインナーシティのキャリアアウトという場所の社会的機能を次のように洞察している。「キャリアアウトは既成の食べ物を売るということ以外にも、多くの役割を果たしている。そうした役割の一つとして、キャリアアウトは、非公式の社交センター、集会所、自慢と評価の場、あるいは合法、非合法、超法規的な、さまざまな幅広い行動の舞台になっている。そして都市のど真ん中にありながら、街の中のアウトサイダーが寄り集まる場所となっているので、いわば辺境の施設のようにになっている³⁰⁾。」

【調査方法】

リーボウはストリートコーナーの男たちのデータの大半を、主に1962年の1月から1963年の7月にかけて実施したワシントンDCの『コロンビア特別区における低所得家族の子育て行動の実践』という研究プログラムのフィールドワークで収集している。この子育て研究は国立精神衛生研究所からの資金を受けて、首都地域衛生福祉局が実施したものである。まず、リーボウは研究の目的についてこう述べている。「本研究は、普通の人々の自分たちの立場、自分たちの言葉で、下層階級の人々の生活を記録し、理解した

いという要求に応えるための試みである」³¹⁾と。そして、参与観察という都市人類学的方法を採用した理由については、「データはアンケートや組織立ったインタビューといった手段ではなく、参与観察によって集められなければならなかった。データは、特定の仮説に基づいてそれを試すのではなく、直接聞いた明確な話によって描かれる下層階級の黒人男性像、とりわけ『ストリートコーナー』の黒人たちの姿でなければならなかった。男性には、父親、夫、またはその他家族の一員として焦点がおかれる。しかしそこには、何が適切で、何が適切でないのかという確固たる仮定は意図されていない³²⁾」。そういった意味で、リーボウの『タリーズ・コーナー』の都市人類学的調査には具体的な調査デザインというのは存在しない。ここで意図されていたものはひたすら実地踏査であった。

【調査対象者とデータの性質】

リーボウによると、データは1962年の12か月間の参与観察と、1963年前半6か月間の断続的な調査をもとに集められている。調査は1年間の四季を通じ、また昼夜すべての時間を通して行われた。資料の大半は、ワシントン第2地区のストリートコーナーを生活基盤として暮らす24人の下層階級の黒人男性から得られたものである。調査対象者となった黒人男性たちは、非熟練の現場作業員、臨時の日雇い労働者、小売業やサービス業の単純作業員、または失業者であった。彼らの年齢は20代前半から40代中盤までにわたっていた。彼らのうちのある者は独身で、ある者は結婚していた。後者には妻・子どもたちと暮らしている者と、そうでない者がいた。そして、本研究の基礎となったデータの大半が、「ストリートコーナー、裏通り、細い路地、玉突き場、酒屋、近隣の個人の家にはしばしば集まるという、この男たちのルーティーンの日々の記録を主体」³³⁾としたものである。

「この場所 [= キャリアアウト] に、あるいは店の前の広いコーナーの歩道に、この地域に住む20人ほどの男たちが定期的に『何の努力も要らない社交』に集まってくる。彼らは、どう考えても一つの集団とは言

えない。8～10人、あるいはそれより少数の男たちがいつでもそこにいる。そこには参加すべきことはなく、義務もなく、仲間であるかどうかを云々する者もまったくいない。そのうちの何人かは、その中の数人に対して簡単な挨拶を交わす以外には口をきいたこともない。親密な友人である者たちもいれば、他の男のことが嫌いな者たちもおり、また彼らのことを敵だとみなしている者たちもいた。しかし、それぞれの男たちは他の者たちもここにいるであろうとわかっているからここに来るのである。彼らはここで食べたり飲んだり、くつろいだ会話を楽しんだり、何か起こっていないかをたずねたり、ふざけたり、女性を見てひやかしたり、『何かが起こること』を見物し、時間を過ごすために来るのである。』³⁴⁾

4-3 E. リーボウが読み解いた都市下層階級の意味秩序

リーボウは、ストリートコーナーにたむろする黒人男性たちを集中的に観察・記述・分析することによって、現代都市スラムに集中的に発生する、混乱、不安定、反コミュニティの力に直面しながら、彼らが多大なコストを払いつつ生き抜き立ち直る様子を、次のような社会関係の発見とともにビビッドに解説している。

- ①まず、リーボウはストリートコーナーの世界の社会構造全体が、おそらく他のどんな社会よりも、そこで暮らす黒人男性たちの「第一次集団的なフェイス・トゥ・フェイスの人間関係の構造と性質」すなわちパーソナル・ネットワークに依存していることを発見した³⁵⁾。
- ②ひどいストレスや悲劇的な状況下にある他の人たちと同様、「これらの男たちは第一次集団をその拠り所として、友好関係や友人関係を、自己尊厳を守り失敗を合理化しごまかすための資源と緩衝材」³⁶⁾として使っている。浮浪する黒人男性たちにとっては、人間がみなそうであるように、「友人関係」は安全と自尊心の源となる。不安定で生活

に選択の余地がほとんどないストリートコーナーの男たちにとっては、「友人関係」は「人間関係をロマンティックにして、格上げするものであり、他者から見ればただの知り合いにすぎない関係が友だちに高められ、ふつうの友だちは親友とされ……友人関係は、望ましさを具体化したもので、ありうべき人間関係であり、「人と人との間の実際の人間関係というよりも、二人の人物の間で『あたかも何々のように』振る舞うことにしようという秘密の同意」³⁷⁾であるかのような関係として意味づけられている。

- ③友人関係について最も印象的な側面は、黒人男性が「親類を友人関係のモデルとして用いていることである。ストリートコーナーのほとんどの男女は互いに親類ではない……にもかかわらず、友人関係を明白にし、説明し、確証するときに、しばしば親類としての繋がりが捏造され」³⁸⁾る。こうした二人の間の「擬似血縁関係」によって、友人関係から親類へ、どちらの方向へも移動ができることになる。ときには、この「擬似血縁関係」は曖昧な関係に正式な構造を与え、はっきりさせるのに利用されている。
- ④しかし、友人と友情に対する態度は、常にうつろい、しばしば両義的で、ときには矛盾している。「ある瞬間、友情はまるで神聖な誓約のようである。次の瞬間には皮肉な搾取の場となる³⁹⁾」。このような状況の急な変化や明らかな論理の矛盾は、パーソナルな関係における個々人のネットワークの構造と特徴に直接関係なくおこる。黒人男性たちのパーソナルな関係とネットワークは流動的で暫定的であり、その関係の弱さが友情の重要性とともに常に自覚されている。
- ⑤リーボウが見出したさらに重要な点は、「彼らの関係はほとんどが完全に今現在におけるもの」にすぎないということである。「友人関係は、お互いのことがよくわからないままでいる二者間の関係のように見える」⁴⁰⁾と彼は述べている。リーボウが見出したストリートコーナーに集まる黒人男性たちの痛烈なパラドックスは、彼らは友人として行動

する必要があるのに、その実は互いに面識があつたりなかつたりの入
り混じった状態のまままで日々を暮らしている点である。

5 E. アンダーソンの都市エスノグラフィーの地平

5-1 E. アンダーソンの問題意識と研究テーマ

アンダーソンは、1990年に出版した彼の代表作『ストリート・ワイズ』(SW)の冒頭で、14年間にもおよぶフィールドワークの場となったフィラデルフィア市内のローカル・コミュニティとの出会いを次のように記述している。

「1975年に妻のナンシーとともにヴィレッジに移り住んだ時には、この地域について研究しようという意図を持っていなかった。しかしローカル・コミュニティと出会い、それが理想的な都市実験室であることを発見することで私の考えは変わった。ヴィレッジが文化的にも民族的にも最も多様な広がりを見せる都市の一つであることに気づいたのである。そこでは、裕福な人びとと、貧しい人びと、ゲイ、ヒッピー、学生、ユダヤ人、ワスプ、イタリア系アメリカ人、東南アジアからの新移民、エチオピア人、ザンビア人、パキスタン人、イラン人その他諸々の人びとが互いにある礼節を持って暮らしている。私は、自然にそういった調整を理解していった。毎日の生活の経験からまた、たまたま関わることになった出来事での経験から、他の新任者がそうであるように文化的ルールを学んでいくことになったのである。そしてそれが近隣住区に対して特別な興味を抱ききっかけとなり、私は正式に研究を始めることに決めた。」⁴¹⁾

【問題意識】

1970—80年代当時のフィラデルフィアは脱工業化段階に入っていて、他の先進大都市圏に先立って、衰退化 (urban decay, decline) 現象の直中にあり、

とくに東南部の旧工業地帯は「住空間の放棄化 (housing abandonment)」 「コミュニティ放棄化 (community abandonment)」が顕在化していた。そしてこの時期、大都市インナーシティに存在する黒人コミュニティでは、工業地帯の撤収と黒人コミュニティじたいの二層分解がはじまっていた。かつての黒人工場労働者地区に見られた貧しいながらも堅実な家庭、コミュニティ生活が弛緩化、解体化しつつあったのである。「アンダーソンが心痛をこめて克明に描くストリート上のドラッグ文化の横行や堅実な家庭、コミュニティ・ライフの風景の喪失の背景には、このような脱工業化段階での黒人の生き方の不確からしさがひそまっている。」⁴²⁾ こうしたアメリカ大都市内部の急激な構造的変化をうけて、80年代中後期から90年代を通じて、「大都市衰退地区の再生」が政策的にも現実的にも注目を集めるようになる。アメリカの「大都市衰退地区の再生」は、アメリカ大都市経済全般の好況化も反映して、「都心」と「郊外」のはざまに広がった大都市インナーシティに共通するテーマとなったのである。

【研究テーマ】

アンダーソンの当初の研究計画では、ヴィレッジ (すなわち人種的には多様であるが中高所得層の白人が増加している地域) の、ジェントリフィケーション (下層住宅地の高級化) が進む近隣地域についての、限られたエスノグラフィックな描写を行う予定であった。それが、ヴィレッジとそこに近接するノーストンのブラック・ゲットーとの関係をテーマとする、より包括的な研究へと大幅な研究計画の見直しを行うことになった。アンダーソンはその理由を、ノーストンと切り離してヴィレッジを理解すること、あるいはその逆も、とくに二つのコミュニティが接する所では不可能であることがわかったからである。そして、その現実が社会的またエスノグラフィカルな問題を象徴していることを理解するに至ったからだとして述べている⁴³⁾。アンダーソンがSWで焦点化した研究テーマは次のように要約することができる。

「(1975年の夏から89年の夏までの) 14年という時間的な経過のなかで、

……私はしだいにストリート・ライフとパブリック・カルチャーに焦点を合わせるようになっていった。それは多様なグループに属する人びとが、公共の場でいかに“上手くやっていく”か、互いの関係をどう築いていくのか、ローカル・ストリート・ライフの本質とは何か、公共の場での行動の処方箋とは何かといった問題である。これらのイシューは前著『コーナーにある居場所』(POC)から連なる論理的発展の結果⁴⁴⁾であることをアンダーソンは強調している。

5-2 E. アンダーソンの調査地と調査方法

【調査地④：フィラデルフィア旧市街地周辺に広がるインナーシティ型コミュニティ】

アンダーソンの主著 SW の調査地は、ヴィレッジ・ノーストン (The Village Northton) と仮称されるフィラデルフィア旧市街地周辺に広がるインナーシティ型コミュニティである。そこは「二つのコミュニティに囲まれている。一つは黒人の低所得ないしはたいへん貧しい（そして道徳的にも非常に未成熟である）人びとのブラック・コミュニティ。もう一つは人種的には多様であるが中高所得層の白人が増加しつつあるヴィレッジ・コミュニティ⁴⁵⁾」である。いわゆる、マルチエスニックな多様化世界である。奥田は、この多様化世界が郊外移住中産階級黒人のUターン組や、郊外生活者に馴染んでいた中産階級白人と子弟たちの back to the city movement の例証であり、この動きが不動産市場のターゲット化した旧市街地のジェントリフィケーションの動向とも見合っていると指摘している⁴⁶⁾。

【調査地⑤：ノーストンのブラック・コミュニティ】

1940年代から1950年代にかけてのノーストンにおける黒人の社会生活は、今日の状況に比べれば、格段に結束力のあるものだった……。その後の変化がアメリカの黒人の大多数の生活に決定的な差異をもたらした。黒人の中には社会的・経済的に上昇し、上・中階層に近づいた者もいた。しかし、このグループのメンバー（黒人ミドル・クラスの人びと）は、「社会的・経済的な移

行にともなって、地理的にも（郊外地域へ）移動する傾向があった。伝統的に有益であったリーダーシップを自ら発揮することもなく、彼らはゲットーから距離をとるようになり、やがて「大都市インナーシティにあるブラック・コミュニティから」離れていった」⁴⁷⁾。

【調査方法：長期にわたる参与観察とインフォーマル・インタビュー】

アンダーソンは、1975の夏から89年の夏にかけて、SWの中でノーストン・ヴィレッジと呼んでいる一般的な地域についてのフィールドワークを行った。その間彼は、多種多様な住民と関わりを持ち、彼らの多くにインタビューを試みた。そのために近くのバー、コインランドリー、持ち帰りまたは座席でのランチ、パーティそしてコミュニティの集まりに足しげく通った⁴⁸⁾。特にアンダーソンが強調しているのは、その研究の多くが「インフォーマル・インタビューと、長期にわたる直接的でエスノグラフィックな観察」に依拠している点である。そして、「それはヴィレッジ・ノーストン、そして地域としてのよりはっきりとした特徴を共有している近接したコミュニティにおける私の経験を引き出した。ある意味では、私は私じしんのインフォーマントになっていった」⁴⁹⁾と回顧している。

アンダーソンは、近隣生活者の参与と、社会学者の観察の二重の役割のスイッチとジョイントの日常的実践を通じて、ノーストンの新しい読みと発見を累積している。ホワイトとアンダーソンにとって同じ参与観察法であるが、ホワイトは《社会科学上の観察と記録》を主旨とした完全な参与者（complete participant）ないし観察者という参与者（participant as observer）であるのに対して、アンダーソンは《社会生活者》を主旨とした完全な観察者（complete observer）ないし参与者としての観察者（observer as participant）である。奥田は、「同じ大都市インナーシティを調査地としても、ノーストンの居住生活者であると同時に、調査対象者と同じエスニシティ（アフリカ系アメリカ人）を属性とするところに、ホワイトと違った意味での「アンダーソンの」新しさがある」⁵⁰⁾とみている。さらに奥田は、「調査方法としてとくに注意されるのは、ヴィレッジとストリート一本を隔てたブラック・ゲットーの取り扱いについ

てである。……ブラック・ゲッターはいわばシンボリック・コミュニティとしてノーストンのレファレンス・グループとしての位置づけにある。大都市衰退地区の再生像としてのノーストンの位置づけに当たって、このブラック・ゲッターの存在性かつねに相互レファレンスする形でノーストンの深層世界に立ち入り、『もの・ひと・こと』の豊富なエピソード等を介して描写している⁵¹⁾ 点を方法論上の特徴と考えている。

5-3 E. アンダーソンが読み解いた都市下層階級の意味秩序

① 【コミュニティのもっとも重要な慣習—“オールド・ヘッド”と若者たちの関係】

伝統的に“オールド・ヘッド”とは勤勉家であり、家庭生活や教会でも信頼の厚い堅実な人物を意味していた。オールド・ヘッドは、教育、支援、励ましといった役割をもつことを期待される。より広い社会での積極的な代表者であり、そして実際、仕事、家庭、法律、そして常識的な作法に関してその責務を負うことができるように、若者たちを社会化していく役割を担っていた。10代後半から20代初めにかけての独身の青年たちは、人生についての有用な知恵や実践的なアドバイスを授けてくれるオールド・ヘッドの能力に信頼を置いていた。オールド・ヘッドは、見守りや道徳的な支援が必要な若者について、「代理父」として働くこともあったのである⁵²⁾。

② 【伝統的なオールド・ヘッドの威信と権威の失墜】

「貧しい黒人たちにとって、通常の経済構造への参加はごく限られたものでしかない。ノーストンの多くの黒人たちは、不十分な教育と技能しかもたず、雇用契約に入った。未熟練でも可能な製造業はイースタン・シティでは減り、それに代わるサービス組織のなかで黒人の若者が就業可能な仕事は低賃金の、また都心部から離れた職場⁵³⁾ だけであった。「インナーシティの多くの若い黒人たちにとって、ドラッ

グや非行といった地下の経済組織は魅力的に感じられる。この組織はノーストンにはびこり、いろいろな場面に手を広げ、通常の経済組織に取って代わったりしていた。……合法的な仕事の機会に恵まれない若者たちは、とくに危険にさらされたのである。地域やその周辺に暮らす法を遵守する人びと、とりわけ高齢者は犯罪や個人的危害に脅かされていた。崩壊と不和の空気、そして犯罪の蔓延するコミュニティは、住民たちを引き裂いたのである⁵⁴⁾。今日では、黒人の若者にとって「犯罪やドラッグが若者の生活の流儀となるにつれ、オールド・ヘッドはその威信と権威を失墜していった⁵⁵⁾」。ドラッグ・カルチャーと手早く多額の現金を手にする機会の広がりによって、オールド・ヘッドたちの人生や仕事についての道徳律は都会で生き抜くための知恵として意義がない、と若者たちは結論づけたのである。また、以前ならオールド・ヘッドになった人物の多くがミドル・クラスの移住によりゲッターを離れたり、あるいはゲッターと縁を切ってしまった。

③ 【SWにおけるストリート・コーナー・ボーイズの役割】

アンダーソンのSWにおいても、ストリート・コーナー・ボーイズが主要登場人物の役割を果たしていることは、SCSと同様である。……若者たちは、家庭とコミュニティの絆が緩む中で、ドラッグの常用と取り引きの役割を担わされる。そこでは、十代を巻きこむストリート上の若者たちの生活世界が、克明に描かれている。「ドラッグの浸透は、貧しいながらも堅実であった家庭、コミュニティの崩壊と相乗しているが、ティーンエイジャーズの未婚子持ち者、売春行為とひきかえのドラッグ買い、ドラッグのディーラーと高級車を乗り回す“成り上がり者”、ドラッグ売買の“端役”を担うことが唯一の確実な仕事の機会⁵⁶⁾」等々の光景が、彼らや取り締まりの警官の言説等を通じて物語られている。

④ 【伝統的モデルとの対極をなす新しい役割モデルの出現】

「新しいモデルは若く、往々にしてストリート・ギャングを出自とす

る人物であり、規範や伝統的な価値観とはおよそ縁遠い。この“新しい”オールド・ヘッドは伝統的なオールド・ヘッドとは多くの面で対極をなしている。もし彼が自分に見合う低賃金の仕事を得たとしても、仕事に身を入れることはなく、結局はパートタイムあるいはフルタイムの、ドラッグの取引やその他の地下の経済組織に入ることになる⁵⁷⁾。「この新たに出現した役割モデルは家庭的な価値をあざけり、そして女性の“ヒモ”をもっていた。彼は彼女たち[に対して]あるいは自分が父親である子供たちに対して何の義理も感じていない。……街などで、高価な衣服や高級車といった物質的な成功をひけらかす事によって、自分の成功を人びとに印象づけることに彼は自身の全存在を賭ける。彼のメッセージを熱心に待ち受けているのは、……彼の生き方や価値観をまねることに魅力を感じる無職の黒人の若者」⁵⁸⁾である。こうして、今日のアメ리카大都市のインナーシティ・エリアに共通して見られる「貧困→麻薬(組織)→ストリート・カルチャーの蔓延(新しい役割モデルの出現)→犯罪と暴力の拡大」という負の因果連鎖が再生産される構造がで上がる。

⑤【ストリート・エチケットとストリート・ワイズ】

道徳的に未成熟なノーストンであってもまったくの解体地域ではない。そこには独自のストリート・ライフとパブリック・カルチャーが存在している。特にアンダーソンは、隣接するヴィレッジ・コミュニティとの間で、お互いの関係をいかに上手にやっていくかという公共的な行動規範が存在することを発見した。さまざまな人びとが折り合う共通のコードが「公共圏」「公共世界」の《ストリート・エチケット》である。いわば市民感覚の制度規範として人びとに課せられるものである。それに対して、タイトルに使われている《ストリート・ワイズないしストリート・ウィズダム》は、錯綜体都市、複雑系の都市生活にあって、「身体の知」ともいふべき体験上の知恵であり術と解釈できる。多くは心の状態を指すののだが、人びとの振る舞いを通して表

現される。それは、「ストリート・ライフでのやりとりといった関わりを通じた知見を代表」し、人びとが遭遇したシグナルから何が起こるのか「状況を見抜く」ことを可能にする。「“ストリート・ワイズ”の人のエッセンスとは、不確定な公共の場での“ふるまい方”を理解していること」⁵⁹⁾にある。人びとは、都市環境についてのある種の“緊張”を伴った、長い、時には困難なプロセスを通してこうした公共的な行為を身に付けることができるのである。

【注】

- 1) Anderson, Elijah, *A Place on the Corner: A Study of Black Street Corner Men*, The University of Chicago Press, 1978, p.x-xi.
- 2) Whyte, William F., *Street Corner Society: The Social Structure of An Italian Slum*, The University of Chicago Press, 1943. (奥田道大・有里典三 共訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣, 2000年。) ; Gans, Herbert J., *The Urban Villagers: Group and Class in the Life of Italian-Americans*, Free Press, 1962. (松本康 訳『都市の村人たち: イタリア系アメリカ人の階級分化と都市再開発』ハーベスト社, 2006年。) ; Liebow Elliot, *Tally's Corner: A Study of Negro Streetcorner Men*, Little, Brown and Company, 1967. (吉川徹 監訳『タリーズ・コーナー: 黒人下層階級のエスノグラフィ』東信堂, 2001年。) ; Suttles, Gerald D., *The Social Order of the Slum: Ethnicity and Territory in the Inner City*, The University of Chicago Press, 1968. ; Kornblum, William, *Blue Collar Community*, The University of Chicago Press, 1974.
- 3) Anderson, Elijah, *A Place on the Corner*, *op.cit.*; ; Anderson, Elijah, *Street Wise: Race, Class and Change in an Urban Community*, The University of Chicago Press, 1990. (奥田道広・奥田啓子 共訳『ストリート・ワイズ: 人種/階層/変動にゆらぐ都市コミュニティに生きる人びとのコード』ハーベスト社, 2003年。)
- 4) Georg Simmel, "Die Großstädte und das Geistesleben," *Jarbuch der GeheStiftung zu Dresden IX*, 1903. (居安正 訳『大都市と精神生活』『橋と扉』, ジンメル著作集 12, 白水社, 1977年。)
- 5) Park Robert E., "The City — Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the City Environment," *American Journal of Sociology*, vol. XX, 1915.
- 6) Wirth Louis, "Urbanism as a Way of Life," *American Journal of Sociology*, 44 (1), 1938. (高橋勇悦 訳『生活様式としてのアーバニズム』『都市化の社会学』鈴木広 編, 誠信書房, 1965年。)

- 7) Park Robert E., Burgess Ernest W., and McKenzie Roderick D., *The City*, The University of Chicago Press, 1925. (大道安次郎・倉田和四生 共訳, 『都市: 人間生態学とコミュニティ論』鹿島出版会, 1972, 219 頁。)
- 8) Thomas W. I., and Znaniecki F., *The Polish Peasant in Europe and America*, Richard C. Badger, 1920, IV. 2.
- 9) McKenzie Roderick D., "The Neighborhood: A Study of Local Life in the City of Columbus, Ohio," *American Journal of Sociology*, XXX II, p.506, 1922.
- 10) Whyte, William F., *Street Corner Society*, *op. cit.* (前掲訳書, 351 頁。)
- 11) Whyte, William F., "Social Organization in the Slum," *American Sociological Review*, Vol. VIII, 1943. (拙訳「スラムの社会組織」『創価大学通信教育部論集』第4号, 2001年, 171 頁。)
- 12) *Ibid.*, (同上訳書, 171-72 頁。)
- 13) *Ibid.*, (同上訳書, 174 頁。)
- 14) *Ibid.*, (同上訳書, 175 頁。)
- 15) Whyte, William F., *Street Corner Society*, *op. cit.* (前掲訳書, 356 頁。)
- 16) *Ibid.*, (同上訳書, 356 頁。)
- 17) *Ibid.*, (同上訳書, 287 頁。)
- 18) Lynd Robert S., and Lynd Helen M., *Middletown: A Study in Contemporary American Culture*, Harcourt, Brace and World, 1929. (中村八朗 抄訳, 『ミッドルタウン』現代社会学体系9, 青木書店, 1990年。)
- 19) 拙稿「ウィリアム・F・ホワイットの都市エスノグラフィー再考」『創価大学人文論集』第12号, 2000年, 164 頁。
- 20) Whyte, William F., *Street Corner Society*, *op. cit.* (前掲訳書, 323 頁。)
- 21) 奥田道大・有里典三 共編著『ホワイット「ストリート・コーナー・ソサエティ」を読む』ハーベスト社, 2002年, 68-69 頁。
- 22) 同書, 71-72 頁。
- 23) Whyte, William F., *Street Corner Society*, *op. cit.* (前掲訳書, 323 頁。)
- 24) 拙稿「エスニック・コミュニティの深層構造(1)」『創価大学通信教育部論集』第3号, 2000年, 35 頁。
- 25) Whyte, William F., "Social Organization in the Slum," *op. cit.* (前掲訳書, 173 頁。)
- 26) Liebow, Elliot, *Tally's Corner*, *op. cit.* (前掲訳書, 4 頁。)
- 27) *Ibid.*, (同上訳書, 4-6 頁。)
- 28) *Ibid.*, (同上訳書, iii 頁。)
- 29) *Ibid.*, (同上訳書, 12-13 頁。)
- 30) *Ibid.*, (同上訳書, 197-98 頁。)
- 31) *Ibid.*, (同上訳書, 7 頁。)
- 32) *Ibid.*, (同上訳書, 8 頁。)

- 33) *Ibid*, (同上訳書, 8頁。)
- 34) *Ibid*, (同上訳書, 14-15頁。)
- 35) *Ibid*, (同上訳書, 121頁。)
- 36) *Ibid*, (同上訳書, 199頁。)
- 37) *Ibid*, (同上訳書, 155頁。)
- 38) *Ibid*, (同上訳書, 125頁。)
- 39) *Ibid*, (同上訳書, 136頁。)
- 40) *Ibid*, (同上訳書, 154頁。)
- 41) Anderson, Elijah, *Street Wise, op. cit.* (前掲訳書, vii頁。)
- 42) 奥田道大・有里典三 共編著『ホワイト「ストリート・コーナー・ソサエティ」を読む』, 前掲書, 188頁。
- 43) Anderson, Elijah, *Street Wise, op. cit.* (前掲訳書, viii頁。)
- 44) *Ibid*, (同上訳書, vii頁。)
- 45) *Ibid*, (同上訳書, vii頁。)
- 46) 奥田道大・有里典三 共編著『ホワイト「ストリート・コーナー・ソサエティ」を読む』, 前掲書, 172頁。
- 47) Anderson, Elijah, *Street Wise, op. cit.* (前掲訳書, 58頁。)
- 48) *Ibid*, (同上訳書, vii-viii頁。)
- 49) *Ibid*, (同上訳書, ix頁。)
- 50) 奥田道大・有里典三 共編著『ホワイト「ストリート・コーナー・ソサエティ」を読む』, 前掲書, 174-75頁。
- 51) 同書, 175-76頁。
- 52) Anderson, Elijah, *Street Wise, op. cit.* (前掲訳書, 3頁。)
- 53) *Ibid*, (同上訳書, 58頁。)
- 54) *Ibid*, (同上訳書, 58-59頁。)
- 55) *Ibid*, (同上訳書, 3頁。)
- 56) *Ibid*, (同上訳書, 79-116頁。)
- 57) *Ibid*, (同上訳書, 34頁。)
- 58) *Ibid*, (同上訳書, 4頁。)
- 59) *Ibid*, (同上訳書, 6頁, 244-46頁。)